

生と死に対する価値観の測定

山口 史織

どんな人にも訪れる死と、死に向かうことが運命づけられている生について、人々はどのように考えているのだろうか。生と死に対する考え方は well-being にも影響を及ぼすものであり、心理学分野において生と死に対する考え方に関する概念構造や、その関連要因を解明する必要があると考えられる。生と死に対する考え方についての研究は既に数多く実施されているが、先行研究には2つの課題がある。1つ目の課題は生と死に対する考え方に関する概念の定義が確立されていないことである。本研究では特に、心理学分野において価値観と態度は異なる概念であるにもかかわらず(大山, 1990)、死生観と生死に対する態度が混同されていることに注目した。死生観は人間一般の生死に対する価値観を構成概念とするものであり、生死に対する態度は対象者自身の生死に対する感情や行動を構成概念とするものであると考えられる。2つ目の課題は文化差の考慮が十分でないことである。死生観には文化差があることが指摘されており(Tierney, 2001; Walter, 2003)、日本人の死生観は西洋の死生観とは異なる部分があると推測される。西洋人は生と死を対立概念として考える傾向があるのに対し、日本人は生と死を表裏一体の概念だと考える傾向があると考えられるため、日本における研究では死生観の生の側面にも注目する必要がある。以上の背景を踏まえ、本研究では死生観を「死から見た生と、生の延長線上にある死に対する捉え方や意味付けで、各人の生死に対する態度の基盤にある価値観」と定義し、新たに「死生観尺度」を開発することを主な目的とした。また、作成した尺度が定義に沿うものであるか検討し、各因子得点の分布や個人内要因と死生観の関連から、大学生・大学院生の死生観の特徴を検討することも目的とした。

本研究では大学生・大学院生を対象に計3回の調査を実施した。予備調査には52名、本調査には342名、再検査のための調査には77名が参加した。調査内容は、基本属性、既存の尺度を参考に作成した死生観尺度、妥当性を検討するための尺度、死生観と関連すると考えられる4つの変数であった。

因子分析の結果、死生観尺度は【生命観】【存在の永続性に対する信念】【人生に対して死が持つ意味】【命の重さ】【死の否定的側面】【苦難としての生】【死の不可知性】の7因子34項目で構成され、どの因子も妥当性・信頼性ともに十分であると判断された。本尺度は、先行研究で見出されなかった側面や、生死に対する態度として表されていた側面、概念の検討が不十分であった側面を含んでおり、また死の側面だけでなく、生の側面も含めて死生観を測定できるため、先行研究の課題を解決することの出来る尺度だと考えられる。

さらに、各下位因子の因子得点の傾向から、大学生・大学院生の死生観の特徴として、生は苦難というよりも尊いものであり、命は存続させるべきであると考えられる傾向があることや、死はよくわからないものにはあるが人生にとって有意味であり必ずしもネガティブなものだとは考えない傾向があること、死後の存在の永続性については「どちらともいえない」という考え方をする傾向があることが見出された。また、死生観と個人内要因にはいくつかの関連が見られた。これらの結果の一部は先行研究と一致しなかった。その理由は対象者の背景や時代背景の違い、死生観と生死に対する態度の違いにあると考えられた。また、死を考える頻度との関連から、【苦難としての生】は対象者自身の生死に対する態度を測定している可能性があり、死生観を測定する尺度としては不十分であることが示唆され、今後の検討課題とされた。

今後は本尺度を活用し、死生観に対する知見を蓄積していくことが期待される。本研究は、死生観という概念を再検討し、人間一般の生死に対する価値観である死生観を研究するための心理尺度を開発したという点で、意義のあるものであったと言えるだろう。(臨床死生学・老年行動学)